

文化 第80巻 第1・2号 一春・夏一 別刷
平成28年9月24日発行

日本語学習者と日本語教師の考える
「学習意欲を高める授業」

—授業参加者のインタビュー調査に基づいて—

アサノワ・グリザル

日本語学習者と日本語教師の考える 「学習意欲を高める授業」

—授業参加者のインタビュー調査に基づいて—

アサノワ・グリザル

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

日本語接触機会が少ないキルギス共和国（以下、キルギス）の日本語教育の現場では教師の役割が大きい。授業の内容は教師によって決まる。教師ならだれでも「学習意欲を高める授業」をしたいと望んでいるが、学習者の学習意欲を維持するには、まず、「学習意欲を高める授業」とは何かを明らかにする必要があると思われる。

本研究では、「学習意欲を高める授業」に注目して、授業参加者（授業に参加している教師と学習者双方）がどのような特性を持つ授業を「学習意欲を高める授業」と考えているか、そして、それは実際の授業で行われているかを調査し、学習者に日本語学習に対するやる気を持たせるために教師はどのような授業をするべきなのかについて考察する。

1.2 キルギスにおける日本語教育事情概観

キルギスは、中央アジアにある旧ソビエト連邦の1つの国で、日本語教育はソ連邦崩壊と前後して、キルギス民族大学で始まった。その後、日本とキルギスの交流が深まるにつれ、国際交流基金から、日本語教育専門家がキルギス民族大学東洋学部に派遣されはじめ、その他の高等教育機関にも青年海外協力隊の日本語教師の派遣が開始された。高等教育機関においては、日本語専門家を目指す者と、通訳・翻訳・企業など実務を志向する者がいるだろう。日本という存在が身近でないキルギスで日本語を学ぶ動機は、①日本留学のため、②日本の文化に関心、③日本語そのものへの趣味、④将来の就職などである。

キルギスの多くの高等教育機関の学習目標は日本語が主専攻の場合、日本語能力試験2級レベルに設定されている。ほとんどの機関が初級教科書として『みんなの日本語』I、II（スリーエーネットワーク編）を使用しているが、中級教科書は教師によって異なる。年間シラバスはある教科書をもとに授業担当者が作るが、教師がシラバスを作る際に大学の学務課からチェックが入り、シラバスの内容を変えられる場合がある。そこで、シラバスを実施する際の大きな問題点として、「教えなければならない学習項目が多い」「授業時間数が少ない」ということが挙げられている（アサノワ 2014）。

2. 先行研究

2.1 学習意欲と動機づけの定義

桜井（1997）は、「動機づけ」と「意欲」は、それほど意味に違いはないが、使用範囲に違いがあると述べている。まず、「動機づけ」は、「喉が渇いたからジュースを飲む、眠くなったから睡眠をとる、といった『広い意味で何かを達成しようとする行動』に対して使う」のに対し、「意欲」は「勉強や仕事といったどちらかと言えば知的なことを達成しようとする行動に対して使うことが多い」と述べている。

教育心理学小辞典では、「学習意欲」を三宅他（1991）が「学習活動を引き起こす人間の内部的動機の総称。意欲という用語は、心理学的には概念規定が明確でなく、通常、動機づけと同義に用いられている」と説明している。

本研究では、桜井（1997）と三宅他（1991）の定義を合わせ、以下のよう捉える。「動機づけ」という言葉は「意欲」より行動範囲が広いということ念頭に置き、「動機づけ」を「行動を起こさせ、一定の目標に方向付け、目標を達成するまで持続させる作用、過程あるいは状態の総称」とする（三宅他 1991, p.37.）。また、「学習意欲」を「学習活動を引き起こす人間の内部的動機の総称」とし、「やる気」と同じ意味で用いることにする。

2.2 日本語教育分野における学習意欲を高める授業に関する研究

学習意欲をいかに持続・高揚させるかが教育の分野において重要な課題であることは論を待たない。そして、学習者に日本語をどのように教えるか、学習者は何を望んでいるかを知ることが、教師に求められていると思われる。渡部ら（2006）は、ニュージーランドの高校生 280 名と大学生 222 名を対象とし、

「優れた」日本語教師の行動特性に対する考え方を質問紙調査によって調査している。その構造は「授業の実践能力」、「専門的知識と教養」、「教室の雰囲気づくり」、「学習者への配慮と教職意識」、「指導経験と資格」、「日本語力と文化的意識」の6因子から成り立っていることが示された。

学習意欲が高まる授業とはどのようなものかを、調査している元田（2005）は、日本国内のN大学で行われた夏期集中コースの受講生78名を対象に質問紙調査を行っている。その結果、まず、第二言語不安と学習意欲の関係について論じ、第二言語学習を阻害する不安を軽減するためには、学習者の習得欲求や上達見込み感だけではなく内発的動機づけ、特に日本語学習に対する興味の向上にも注意を払うことが必要であると述べている。

山本（2007）は、日本語学習者の学習意欲低下要因を探るために、13名の学習者を対象に、2度にわたってアンケート調査を行っている。その結果、魅力的な授業デザインが学習意欲の低下を防ぐ重要な条件であること、そして教師が思う以上に学習者は精神的支援を求めていること、フィードバックすることで学習意欲低下を抑制することが示された。

そして、日本語の学習意欲を高める授業についての先行研究（倉八1993、二宮ら2012など）の多くは、学習者の動機づけを高める授業実験を行い、その効果を検証したものである。それと比べて、実際の教室場面の主役である学習者と教師が「学習意欲を高める授業」をどのように考え、その実態はどうなっているかについての調査は少ない。

3. 調査概要

3.1 調査対象及び調査期間

本研究では、実際の授業を見学したり、ビデオに撮ったりして分析することはできなかったが、教師と学習者の説明を聞いて、推定するという方法をとる。調査対象者はキルギスの2大学で教える5名の日本語教師及び7名の日本語学習者で、2015年の10月にインタビュー調査を行った。調査対象者の学習者についてであるが、調査に協力した教師全員のクラスの学習者に協力してもらい、2大学の学習者全員ではなくインタビュー調査に時間のある学習者だけである。ここでは、それぞれの学習者がいずれの教師に属しているかなどの個人が特定できるような情報は用いない。その調査対象者の内訳を表1と表2に示す。場所は大学の教室を利用した。調査はロシア語とキルギス語を用いて

行った。データは筆者が日本語に翻訳したものをを用いる。

表1 調査対象とする学習者の属性

学習者	性別	学年	日本語の レベル
S1	男	1年生	初級
S2	女	1年生	初級
S3	女	2年生	初級
S4	女	3年生	中級
S5	男	3年生	中級
S6	女	4年生	中級
S7	女	4年生	中級

表2 調査対象とする教師の属性

教師	性別	教授歴	指導する クラス	日本語 能力
T1	女	5年以上	中級	上級
T2	女	5年以上	中級	上級
T3	女	5年以上	初級	上級
T4	女	5年以下	中級	上級
T5	女	5年以下	初級	上級

3.2 調査項目及び分析方法

インタビュー調査では、主に学習を行う場である日本語の授業に焦点を当て、どのような授業が学習意欲を高める授業だと考えているかについて尋ねた。意識のみを調べたとしてもそれは実際に行われているかが分からず、「学習意欲を高める授業」の実際と授業参加者の意識が一致しているかどうかについて知ることができない。そのため、授業参加者が考えている「学習意欲を高める授業」が、実際の授業で行われているかについても聞いた。授業参加者が考えている「学習意欲を高める授業」は、実際の授業で行われていると回答したものを、以下では「その実施」と呼ぶ。

インタビューで得られた音声データを文字化した。本研究では、限られた学習者と教師の語りから、どのような特性を持つ授業が学習意欲を高める授業だと考えられているか、そして、「その実施」はどうなっているかを明らかにすることを目的としている。そのため、インタビューデータの処理には、佐藤（2008）を参照しながら調査対象者の発言内容に定性的コードを付け、コーディングによるカテゴリー化を行った。具体的な作業手順は以下の通りである。1) 1行ごとのコーディングを行い、その内容を表す単語や短い語句を割り当てることで「コード」を作成した。2) コード同士を比較して、類似するものを統合し、コードのまとまりごとに内容を表す語句を割り当てることで「カテゴリー」を作成した。3) 各カテゴリーが担っている役割を再検討し、カテゴリー間の関連付けを行った。関連付けによってまとめられたものを「グループ」と呼ぶ。

次に、調査結果の提示についてだが、まず、教師の意識についての結果と「その実施」を示し、考察を行う。そして、学習者の意識についての結果と「その実施」を示し、考察を行う。最後に、教師と学習者の結果の異なる点を照らし合わせながら考察を行う。

4. 調査結果及び考察

4.1 教師が考える「学習意欲を高める授業」及び「その実施」

まず、教師の発言から生成された「学習意欲を高める授業」と「その実施」の結果を、表3に示す。教師の考えている「学習意欲を高める授業」については5つのカテゴリを作成し、これを3つのグループにまとめた。次に「その実施」についてだが、実際の授業で取り入れていると回答した教師名を表3の「その実施」のところに記した。以下、具体的に見ていく。

表3 教師の発言から生成された「学習意欲を高める授業」と「その実施」

教師の考えている「学習意欲を高める授業」			「その実施」
グループ	カテゴリ	定義	
教室の雰囲気	楽しい授業	授業の雰囲気を楽しくする	T2, T3, T4, T5
	リラックスできる授業	教室を寛いだ、そしてリラックスできる雰囲気にする	T2, T3, T4, T5
授業の実践能力	面白い内容	面白い内容の授業をする	T2, T3, T5
	様々な教室活動	様々な教室活動を使用する	T2, T3, T4, T5
日本語以外の知識	日本文化	授業の中に日本文化を取り入れる	T2, T3, T4, T5

「楽しい授業」と「リラックスできる授業」は、授業を楽しくてリラックスできるようにしたら学習者の学習意欲が上がるコードから生成したカテゴリである。協力してくれた教師全員が授業を楽しく、そして、リラックスできるようにすると学習者の学習意欲を上げることができると述べている。T4は以下のように言及している。

T4：中級レベルに入ると日本語の学習内容が難しくなり、学習意欲が低くなる要因の1つになると思います。だから授業を楽しくして、教室の雰囲気をリラックスできるように変えることで学習者の学習意欲を少しでも上げることができます。

教師全員から挙げられたこの「楽しい授業」と「リラックスできる授業」が実際の授業で行われているかを尋ねた。その結果、T1以外の教師は実際の授業に取り入れていると述べた。T1に、自分が考えている「学習意欲を高める授業」をなぜ実際の授業の中に取り入れていないのかを聞いた。T1は次のように語っている。

T1：学習者を一回リラックスさせると勉強に集中しにくくなると思います。だから、学習に集中させるために、できるだけ、クールな雰囲気を保つようにしたほうがいいです。

次のグループのカテゴリーは、「面白い内容」と「様々な教室活動」で、授業の内容を面白くすることと、様々な教室活動を使用することで学習意欲が高まるというコードをまとめたものである。協力者全員が面白い内容の授業と様々な教室活動は学習者の学習意欲を高めると考えている。これに関してT3は次のようにコメントをしている。

T3：授業の内容は学習意欲に大きく影響を与えたいと思います。だから、学習者に興味のあるテーマを授業の内容にして、色々な活動と組合せることで、学習者のモチベーションを上げることができます。

教師全員から挙げられたこの「面白い内容」と「様々な教室活動」は実際の授業の中で行われているかどうかを尋ねた。その結果、T1とT4以外の教師は授業の中に取り入れていると発言した。これに関してT2は次のように言及している。

T2：グループワーク、ペア学習などの様々な活動を使い、授業を面白くして、学習者の意欲を上げることは教師の義務だと思います。これができない教師は教師として働かないほうがいいです。だから、私も教室の雰囲気だけでなく、色々な活動を使い、内容まで面白くするためにいつも頑張っています。

しかし、「面白い内容」と「様々な教室活動」をあまり実際の授業の中に取り入れていないと回答したT1は、次のようにコメントをしている。

正直にいうとシラバス通りの授業をしています。毎回様々な教室活動をし、面白い内容の授業を工夫していると嘘を言いたくないです。なぜしていないかという、まず、この大学は給料が少ないから、別の仕事もしなければなりません。だから授業を面白くするための時間がありません。しかし、学習者も面白い授業を望んでいるから、月1回ぐらい学習意欲を引き出すような活動を授業の中に取り入れています。ちょうどこの間プロジェクトワークの活動をして、クラスはとても盛り上がりました。

そして、これに関しての T4 の発言は次の通りである。

T4：教科書を使って、日本語を教えています。教科書に書かれてある内容は全てが面白いとは言えません。例えば、教科書のある内容には、まだ日本に行ったことがない人にとって想像しにくい場面もあります。その説明はしていますが、学習者にとって面白いかどうかは判断しにくいです。

そして、最後は「日本文化」で、日本文化を授業に取り入れることで学習意欲を高めることができるというコードから生成したカテゴリである。このカテゴリは協力者全員から挙げられたもので、T2 は次のように語っている。

T2：日本語の勉強は、自分ではやる気が起きにくいと思います。授業の中に日本文化を取り入れることで、日本語にもっと興味を持ち勉強したいという気持ちになると思います。

そして、この「日本文化」が、実際の授業に取り入れられているかどうかを教師に尋ねた。T1 以外の教師は実際に取り入れていると回答した。これに関して T5 の発言は次の通りである。

T5：もちろん、できるだけ面白くて、楽しい授業をするように頑張っています。日本文化も毎回の授業で触れるようにしています。実際に行にくい場合はビデオで見せたりします。学習者も日本文化に興味がありますし、学習者の意欲にも繋がります。

以上、教師が考えている「学習意欲を高める授業」と「その実施」を見てきた。その結果、教師全員が「リラックスできる授業」と「楽しい授業」といった教室の雰囲気は、学習者の学習意欲を上げることができると考えている。そして、T1以外の教師は実際にも教室の中で工夫をしていると述べている。外国語の授業では、学習が進むにつれ学習者が学習不安をどんどん感じてくる。だからこそ、教室の中を楽しくする、リラックスできるような形にする必要があると思われる。

次に、「面白い内容」と「様々な教室活動」は学習者の学習意欲を上げる重要な要因の1つであることが分かる。これも実際の授業に取り入れていると述べた教師の数が多し。グループ活動やペア学習など、聞き合い学び合う場面を意図的に授業に取り入れ、協力して課題に取り組むことで、自ら学ぼうとする意欲を育てる可能性もあろう。しかし、シラバス通りに日本語を教えていると述べたT1とT4は、授業の内容が面白いかどうかという点を疑問に思っていることが分かる。もちろん、大学としてはシラバス通りに授業を進めなければならない。しかし、日本語の教科書のキルギスの社会の人にとって理解しにくい部分を少し変えることで、面白い内容にすることも不可能ではないと考えられる。

最後の日本語以外の知識の「日本文化」のカテゴリーについてだが、教師が日本文化を紹介することによって、より日本文化が身近に感じられ、学習者の学習意欲にも繋がると考えられていることが読み取れる。

以上、教師の調査結果を見てきたが、今回の調査協力者の中に「学習意欲を高める授業」を行おうという意識を持っていても、実際にはあまり取り入れている教師もいる。その原因として、大学のシラバスや授業時間などが考えられるが、もう1つの大事な要因として教師の経済的な面が挙げられ、複数の機関に勤めたり、アルバイトをしたりしなければ、生活できない実情が見られる。しかし、教師の指導が学習者の学習意欲を大きく左右する可能性があるため、教師には少しでも工夫してほしいと考える。

4.2 学習者が考える「学習意欲を高める授業」及び「その実施」

学習者の発言から生成された「学習意欲を高める授業」と「その実施」の結果を、表4に示す。今回の調査では、中級レベルの学習者のみに見られた回答もあったので、そのカテゴリーはゴシックにした。

学習者が考える「学習意欲を高める授業」については10のカテゴリーが作られ、これを4つのグループにまとめた。次に、「その実施」についてだが、実際の授業で行われていると回答した学習者名を表4の「その実施」のところに記した。以下、具体的に見ていく。

表4 学習者の発言から生成された「学習意欲を高める授業」と「その実施」

学習者が考えている「学習意欲を高める授業」			「その実施」
グループ	カテゴリー	定義	
教室の雰囲気	リラックスできる授業	教室を寛いだ、そしてリラックスできる雰囲気にする	S1, S2, S3, S4, S6
	楽しい授業	授業の雰囲気を楽しくする	S1, S2, S3,
授業の実践能力	面白い内容	学習者の興味のある、またニーズに応じて、面白い内容の授業をする	S1, S2, S3, S6
	適切な指導	学習者それぞれのレベルに応じて適切な指導をする	
	様々な教室活動	授業中、様々な教室活動を使用する	S1, S2, S3, S6
	日本語でコミュニケーション	日本語でたくさんコミュニケーションができる	S4, S6
日本語以外の知識	日本文化	日本の文化を取り入れる	S1, S2, S3, S4, S5, S6, S7
	日本のサブカルチャー	教師が日本のアニメ、漫画やドラマなどをよく知り、それを授業の中にも取り入れる	
教師の関わり方	フィードバック	学習者に適切なフィードバックを与える	
	教師の言葉かけ	学習者をほめたり、励ましたりする	S1, S2, S3, S4,

まず、教室の雰囲気に関する「楽しい授業」と「リラックスできる授業」は、授業を楽しく、リラックスできるようにしたら学習者の学習意欲が上がるというコードから生成したカテゴリーである。このカテゴリーは協力してくれた学習者全員から挙げられたもので、授業を楽しく、そして、リラックスできるようにすると学習者の学習意欲が高まると考えられている。これについてS6は次のように語っている。

S6：普段、重い雰囲気での授業では、授業がいつ終わるかを待って、時計ばかり見えています。勉強したいという気分にはなりません。授業内容がいくら難しくても教室の雰囲気が楽しかったら、頑張ろうと思います。

そして、これが実際の授業に取り入れられているかを学習者に尋ねた。その結果、S5とS7以外の学習者が実際に行われていると回答した。これに関してS5は次のように言及している。

S5：授業はいつも楽しくて、リラックスできる授業とは言えません。先生もあまり笑わないし、学習者も静かだし、正直に言うと重い感じの授業だと思っています。

次に「授業実践能力」のグループの中で、学習者全員に挙げられたカテゴリーは「面白い内容」と「様々な教室活動」である。様々な教室活動を使用することと学習者の興味のある、また学習者のニーズに応じて授業の内容を決めるというコードから生成したカテゴリーである。協力者全員が面白い内容の授業と様々な教室活動は学習者の学習意欲を高めることができると考えている。これについて、S1は実際の授業でも取り入れられているとコメントをしている。

S1：色々な教室活動は学習者の学習意欲を高めると 생각합니다。毎回の授業でも先生が面白い活動、mmm 例えばゲームなどを使っていますので、みんな楽しく勉強しています。

「面白い内容」と「様々な教室活動」が実際の授業の中で行われているかどうかについて、学習者に尋ねてみたところ、S1、S2、S3とS5は「行われている」と述べた。「行われていない」と回答したS7は、次のようにコメントをしている。

S7：色々な教室活動が使われているとは思いません。いつも授業では文法を勉強して、例文を作って、それからテキストを読むという形です。時々聴解がありますが、私は聴解の内容があまり分からないから面白いとは言えません。

そして、「授業実践能力」のグループの中で中級レベルの学習者のみに見られる「適切な指導」と「日本語でコミュニケーション」のカテゴリーがある。これは、学習者のレベルに応じて適切な指導をすることと、授業中たくさん日本語でコミュニケーションをするというコードから生成したカテゴリーである。中級レベルの協力者全員が、学習者に合った適切な指導を行うことと日本語の授業でたくさんコミュニケーションをとると、学習者の学習意欲が高まると考えている。これについて、S6は次のように語っている。

S6：日本語を使って話すチャンスは主に教室の中だけです。授業中も日本語でコミュニケーションをしています、もっと話せる機会があったら、みんな話してみたい、日本語をもっと頑張りたいという気持ちになると思います。

「適切な指導」と「日本語でコミュニケーション」が実際の授業の中で行われているかどうかについて、学習者に尋ねてみたところ、S4とS6は「日本語でコミュニケーション」は授業中に行われているが、もっと行われてほしいと回答した。そして、「適切な指導」は中級レベルの学習者全員があまり行われていないと述べた。

そして、「日本文化」と「日本のサブカルチャー」は、日本文化、日本のサブカルチャーをよく知っている教師が、それを授業の中にも取り入れることで学習意欲を高めることができるというコードから生成したカテゴリーで、協力者全員から挙げられたものである。これに関するS3の発言は以下の通りである。

S3：日本のアニメが大好きで日本語を勉強しています。日本で流行っているアニメについても時々教えてくれるといいと思います。現在の日本のアニメのことも知りたいし、もっと頑張りたいという気分にもなると思います。

そして、この「日本文化」と「日本のサブカルチャー」が、実際の授業に取り入れられているかどうかを学習者に尋ねた。協力者全員が「日本文化」は取り入れられているが、「日本のサブカルチャー」は取り入れられていないと回答した。S4は、次のように語っている。

S4：いつも授業の時日本人の宗教、茶道、書道などの紹介が出てきますが、最近のポップカルチャーなどについての話は出てこないです。先生に聞いても「そういうのはあまり知らない」と言われます。時々日本の最近の漫画やアイドルの話もしてくれると、日本語だけでなく日本語以外のことも知ることができ、視野も広がると思います。

最後の「教師の関わり方」で、協力者全員に挙げられたのは「教師の言葉かけ」のカテゴリーである。「教師の言葉かけ」とは、授業中のタイミングのよい励ましの言葉が、学習者に安心感を与え、学習の推進力となるというコードから生成したカテゴリーである。これに関してS2は次のようなコメントをしている。

S2：教師に褒められると、その教師の話が力になって、もっと頑張りたいと思うようになります。

実際の授業で「教師の言葉かけ」がどのくらい行われているかについて学習者に尋ねた。その結果、S1、S2、S3、S4がよく使用されていると回答し、S5、S6、S7があまり使用されていないと回答した。

「教師の関わり方」のグループの中に中級レベルの学習者のみに見られる「フィードバック」のカテゴリーがある。学習者が学習意欲を持ち学習に取り組むために、学習者の学習スタイルに合ったフィードバックを与えるというコードをまとめたものである。中級レベルの学習者は、教師からフィードバックが与えられることで学習意欲が高まると考えている。フィードバックに関してS5は次のように述べている。

S5：フィードバックを受けることで、自分をふりかえることができ、さらに高い目標を持って、もっと学習意欲が高まってくると思います。

「フィードバック」が、実際の授業でも取り入れられているかどうかを学習者に聞いたが、学習者全員が「あまり行われていない」と回答している。フィードバックについてのS7の発言は次のとおりである。

S7：今まで日本語を辞めたいと考えたことが何回かありました。その原因は日本語学習の難しさやクラスメイトに追いつけないことだったと思います。どのようにして勉強していけばよいかも分からなかったです。もし先生に、自分ができていないところを指示して、自分に合いそうな勉強の仕方や不安をなくす方法などを教えて、フィードバックしてくれたら、もう少し頑張っただろうと思っています。

以上、学習者の考える「学習意欲を高める授業」と「その実施」を見てきた。教師と同じく学習者にとっても教室の雰囲気は大事な要因であることが分かる。「リラックスできる授業」に関して、S5とS7以外の学習者は実際に取り入られていると回答し、「楽しい授業」に関しては初級レベルの学習者のみが実際に取り入られていると回答している。中級レベルに入ると学習内容も難しくなり、学習者も緊張しているため、できるだけクラス全体がリラックスできるような話題などを随所にちりばめることも学習意欲につながると考えられる。そして、リラックスできるところと授業に集中するところをうまく切り換えるのも教師の仕事だと思う。

次に、授業の「実践能力」の中に挙げられたのは、教師の回答と同じく「面白い内容」と「様々な教室活動」がある。「その実施」について初級レベルの学習者とS6が実際に行われていると述べている。日本語教師だれもが毎日の教室活動でどのようにしたら学習者の学習意欲を向上させられるかを考えている。それは、学習者のレベル、関心、興味、ニーズなどを把握して取り入れているから、学習者全員を満足させられるとは言えない部分もあると考えられる。

次に、中級レベルの学習者のみに挙げられた「適切な指導」と「日本語でコミュニケーション」のカテゴリーを見る。中級レベルに入ると学習内容も難しくなり、学習者の日本語レベルにも差が出てくる。それぞれの学習者に対して適切な指導を行ってほしいと学習者が願っていることが分かる。キルギスのように、日本人観光客が少なく、日本人と日本語でコミュニケーションをする機会も少ない環境では、学習者は教室にそういうチャンスを求めるが、S5とS7が教室の中で学んだ日本語を用いてコミュニケーションをするチャンスがあまりないと述べている。大学の限られた時間で日本語すべて（文法、会話、漢字、作文など）を教えなければならないと思われるが、コミュニケーションを中心とした授業を実施する際には、楽しさや興味という学習者の内発的動機付

けを喚起できる可能性がある。

そして、学習者は教師に日本語以外の知識も持ってほしいと考えていることが分かる。その例として「日本文化」と「日本のサブカルチャー」が挙げられる。教師と違って、「日本文化」以外に「日本のサブカルチャー」も学習意欲を高めると考えていることが分かる。学習者が考える「日本文化」とは茶道、書道、歌舞伎といった日本の伝統的な文化であり、「サブカルチャー」とは、現代のドラマや映画、アニメ、漫画、ゲームなどのものであるようだ。それを求めて日本語を学習し始めた学習者もいることが分かる。このように、日本語学習の動機と日本のポップカルチャーへの関心が深く関連していることがわかる。この点は、キルギスの日本語学習者のみならず、他の国の日本語学習者にも共通しているのではないかと考えられる。

最後の「教師の関わり方」のグループに「フィードバック」と「教師の言葉かけ」という2つのカテゴリーが挙げられている。フィードバックがなければ、目標は、たとえそれが重要な目標であっても顕著さと重要性を失い、最終的には棚上げされてしまう（ドルニエイ 2005）。だから、授業の中に取り入れ、進捗についてのフィードバックを行うことで、学習者は自分の状況を教師に知らせることや、質問の機会を得ることができる。学習者の回答から、フィードバックでは、できていない点よりむしろできている点を強調し、進捗を確認することによって、学習者の達成度を向上させることができると読み取れる。

そして、授業内容より教師の言葉かけや授業内容以外の余談の方が、興味をもっていることがわかる。また、教師と学習者の間に信頼関係があれば動機づけにも役に立つと言える。

4.3. 調査結果の異なる点の考察

上記の調査結果に基づいて、学習者と教師の異なる点を中心に、考察をする。まず、「教室の雰囲気」の中の「楽しい授業」というカテゴリーについてだが、教師も学習者も学習意欲が上がるという意識を持っていることが分かる。しかし、多くの教師が実際の授業に取り入れていると述べているのに対し、中級レベルの学習者は取り入れていると述べている。これは、教室内の楽しい雰囲気の重要性を示している。特に中級レベルの外国語学習では進歩を阻害する大きな要因として言語不安があり、それが外国語習得を妨げる大きな

要因になる。例えば、間違っても恥ずかしい思いをしないような許容的な雰囲気教室内に作り上げる必要性がある。

「授業の実践能力」の中の「適切な指導」と「日本語でコミュニケーション」が学習者のみに挙げられたカテゴリーで、多くの学習者によるとあまり行われていないことが分かる。このことから、特に中級レベルのクラスにより多くのコミュニケーション機会を提供する必要があることが示された。日本と接触が少ない国の学習者に日本語でたくさんコミュニケーションをとりたいという気持ちがあることは言わなくてもだれもがわかる。日本語でのコミュニケーションに対する学習者の意欲を引き出すとともに、ロールプレイやプロジェクトワークなどのコミュニケーション中心の場を設定し、学習者の興味や関心に着目する必要があると思われる。

「日本語以外の知識」の中の「日本のサブカルチャー」は、調査結果によると実際に行われていないことが分かる。アニメや漫画は日本語学習を始める動力として大きな役割をはたして、キルギス人日本語学習者は、「日本のサブカルチャー」を通して日本への興味を持つようになっていると言える。しかし、日本のサブカルチャーに学習者が大きな影響を受けているのにも関わらず、日本語教師が、学習者が求めているサブカルチャーのことを知らないというのが現状だと思われる。教師は学習者が何に関心を持っているかを知るべきだと考えられる。

「教師の関わり方」の中の「フィードバック」も実際には行われていないことが分かる。今回の調査結果から、教師の肯定的なフィードバックは授業の雰囲気を温かくし、学習者の学習意欲にも影響すると言える。さらに教師のフィードバックにより、今後どうすればよいかをはっきりさせると、大きな成果にも繋がるだろう。そして、学習者の授業への意欲を高め、自信をつけるためには教師からのフィードバックがなくてはならない重要な役割を果たしていると考えられる。

5. まとめと今後の課題

本研究では、インタビュー調査を用いて、キルギス人日本語学習者とキルギス人日本語教師が考える「学習意欲を高める授業」とは何かを分析した。

その結果、教師は、①楽しくて、リラックスできる授業であること、②内容が面白くて、様々な教室活動が使用される授業であること、そして③日本文化

を取り入れて紹介することの3つから「学習意欲を高める授業」を評価していることが分かった。「その実施」についてだが、多くの教師は実際の授業に取り入れていると述べている。

そして、学習者の調査結果からは、教師の回答と共通するものとして、①楽しくてリラックスできる授業、②面白い内容で、日本語でたくさんコミュニケーションができる授業と、様々な教室活動が使用され、適切な指導が行われる授業、③日本文化と日本のサブカルチャーも取り入られている授業が挙げられた。そして、教師と違って、学習者のみに見られた「教師の関わり方」の④教師の言葉かけとフィードバックが行われる授業が「学習意欲を高める授業」だと評価していることが分かった。そして、日本語のレベルが上がるにつれ、「学習意欲を高める授業」に対する学習者の意見やコメントも多くなってくるということが分かった。「その実施」についてだが、初級レベルの学習者のほとんどが実際の授業で行われていると発言したのに対して、中級レベルの学習者があまり行われていないと発言している。

以上の結果を組み合わせてみると、キルギス人日本語学習者と教師が求めている「学習意欲を高める授業」は、①教室の雰囲気を楽しむこと、②学習者のレベル、ニーズに応じた指導をし、活発な教室活動ができる授業をすること、③日本語知識だけでなく、日本語以外に関する知識も豊かに得ることが分かった。そして、今回の調査で教師の回答には見られなかったが、学習者のみから挙げられた「教師の関わり方」がある。学習者にとって、教師とのフィードバックや教師からの言葉かけが学習意欲を高める重要な要因の1つであることが明らかになった。しかし、教師と学習者の考える「学習意欲を高める授業」は実際の授業に取り入れているかどうかに関してだが、教師と学習者の間にギャップが見られた。

今回は教師の協力者の数が5名、学習者の数が7名で少なく、調査結果の一般性が十分にあると言えない。そのため、次の研究では協力者の数を増す必要がある。

参考文献：

アサノワ・グリザル (2014) 「〔調査報告〕キルギスの大学におけるシラバスと非母語話者教師の教師研修について」『言語化学論集』18, pp.75-87.

- 倉八順子 (1993) 「プロジェクトワークが学習者の学習意欲及び学習者の意識・態度に及ぼす効果 (1) 一般化のための探索的調査」『日本語教育』80, pp.49-61.
- 桜井茂男 (1997) 『学習意欲の心理学—自ら学ぶ子どもを育てる』東京: 誠信書房.
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法—原理・方法・実践』新曜社.
- スリーエーネットワーク (1999) 『みんなの日本語初級 I 本冊』スリーエーネットワーク.
- スリーエーネットワーク (1999) 『みんなの日本語初級 II 本冊』スリーエーネットワーク.
- ゾルタン・ドルニェイ (2005) 『動機づけを高める英語ストラテジー 35』米山朝二・関昭典 (訳). 大修館書店.
- 二宮理佳・川上麻理 (2012) 「多読授業が情意面に及ぼす影響—動機づけの保持・促進に焦点をあてて—」『一橋国際教育センター紀要』3, pp.53-66.
- 三宅和夫・北尾倫彦・小嶋秀夫 (1991) 『教育心理学小辞典』有斐閣, p.37.
- 元田静 (2005) 『第二言語不安の理論と実態』溪水社.
- 山本晃彦 (2007) 「学習意欲の変化を探る - 教師の力で意欲低下は抑制できるか - 」『拓殖大学日本語紀要』17, pp.61-77.
- 渡部倫子・佐藤礼子・狩野不二夫・縫部 義憲 (2006) 「日本語学習者が求める日本語教師の行動特性: ニュージーランドの高校生と大学生を対象として」『日本教科教育学会誌』29, pp.59-66.

Perspective of Japanese teachers and students on improving motivation to learn Japanese language

Gulzar ASANOVA

The role of instructors who teach Japanese language outside of Japan to students learning Japanese as a foreign language is quite diverse. The role of motivation among students is significant in terms of learning a new language and hence the need to study the lessons and factors to increase students involvement and motivation in the learning process. There are many studies published for improving the motivation but practical studies and methods study is limited.

The goal of this research is to collect assumptions of teacher and students regarding motivation of Japanese language teaching methods by interviewing Kyrgyz Japanese language instructors and students. The main data was collected from interviews and lessons taught by the instructors in Kyrgyzstan.

The result indicated that the learners had higher motivation when classroom had (1) an interesting and encouraging atmosphere, (2) classes having activities and practices, (3) lesson not only including grammar and vocabulary lessons but also cultural contents.